2002年（平成14年）6月　振興会だより第8号　立命館大学経営学振興会　〒525-8577　草津市野路東1-1-1　Tel.077-561-3941　Fax.077-561-3957

アクロス
立命館大学 経営学振興会だより
ACROSS

学部創設40周年、経営学振興会の発展的展開を！

立命館大学経営学部長　玉村　博巳

前学部長千代田教授は、「振興会だより」第6号で経営学振興会設立の目的を、産官学連携を強めようとする中で立命館大学を卒業された産業界のみなさまと、経営学部の教員とりわけ現実の経営に根ざした経営学研究を志向する教員とが共同で取り組むことがとりわけ重要であったこと。またこの間の具体的な取り組みとして、講演会、異業種交流会、セミナー、学生に話しかけるシンポジウム、学生によるビジネスプラン・コンテストと優秀者の表彰など多彩な取り組みを行ってきたことが紹介されています。

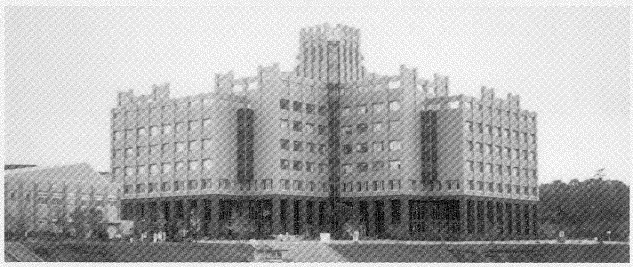
ところで1962年に創設された経営学部は、今年40周年を迎えることになります。この間、「自由と清新」の建学の精神と「平和と民主主義」の教学理念に基づき、豊かな教養と経営学の専門性を身につけた、多くの人材を社会に送り出してきました。現在、大学・学部をとりまく状況は大きく発展・変化しており、その中で多様化する企業行動を、科学的かつ実践的に捉えることのできる人材、創造的で豊かな人間性を備えた人材を養成し、社会に送り出すことがますます重要な教育目標となってきています。ここでいう「企業行動を実践的に捉える」うえで、これまでの経営学振興会の取り組みが果たした役割はきわめて大きいと考えています。

また経営学部創設40周年は、ＢＫＣ新展開5周年、プロフェッショナルコース開設の初年度にもあたります。この年に経営学部では40周年記念事業を企画していますが、なかでも「1998年5月に発足した経営学振興会をさらに広範な校友の参加を可能にするものへと発展的に展開させて、校友の懇親と交流やそのなかで経営学振興において新たな飛躍の条件を整えるべき大切な機会」とし、また最も重要な事業として「経営学校友会（仮称）」設立総会、記念講演会、レセプションを結びつけた企画を11月30日に予定しています。「経営学部校友会（仮称）」（同窓会）は校友の交流だけでなく、その中で産官学交流・連携を進めるため上記の「経営学振興会」の事業を継承・発展させたいと考えております。

新学部長として経営学振興会会員のみなさまからの暖かいご支援を、引き続きお願い申し上げる次第です。

経営学部創設40周年を記念して経営学部校友会（仮称）が発足します。

立命館大学経営学部は、今年学部創設40周年を迎えます。経営学部ではこの年を記念する様々な取り組みを、秋以降連続して行います。各界から講師を招き、今日注目されるビジネスのトピックスをとりあげた連続講演会やシンポジウムを開催します。また、経営学部の卒業生を結集する『経営学部校友会（仮称）』を設立し、右記の日程で、記念講演会、設立総会等を開催します。振興会会員の皆様のご参加をお待ち申しております。



日　時：2002年11月30日（土）
会　場：京都ホテルオークラ

Ⅰ、経営学部校友会（仮称）設立総会
　時　間；午後2時～3時

Ⅱ、記念講演会
　時　間；午後3時～4時30分
　演　題；「ユニバーサル・スタジオ・ジャパンの成功」
　講　師；阪田　晃氏
　（ユニバーサル・スタジオ・ジャパン代表取締役社長）

Ⅲ、記念レセプション
　時　間；午後5時30分～7時30分

連続講演会等、今後の行事については、その都度お知らせいたします。

はじめに

今回は、三井住友海上火災保険株式会社との間の学術交流協定により開講されている「リスク・マネジメント論」ご担当の、同社顧問早崎健先生にインタビューしました。このインタビューを通じて立命館大学が取り組んでいる産学協同の取り組みの一端をお知らせできればと思います。立命館大学ではこの間産学協同の取り組みを積極的に進めてきておりますが、同社との学術交流協定は立命館大学としても産学連携に取り組み始めた初期の段階のものでした。

大教室ですから、講義中に手を挙げて聞く学生はいません。質問のある人は講義が終わってから2，3人連れ立ってくると言う状態です。どの程度理解しているか初めは解らなかったのですが、思ったより解っていただいているようです。

阪神大震災やニューヨーク・テロ事件など最近はリスクが高まって学生の皆さんの「リスク・マネジメント」への関心が高まっていますが、まずは1，2年生は基礎的な理論的な勉強をしていただくのがよいと思います。もっとも現実は理論通りには行きません。

おじゃまします。

リスク時代の経営

～産学連携の先駆的取り組み～

早崎 健 氏
（三井住友海上火災保険株式会社顧問）

立命館大学との学術交流協定の経緯

この講座に関係いたしましてから、もう8年になります。いきさつですが、住友海上としてはかつて立命館大学とは保険のおつきあいはなかったのですが、当初は営業として立命館大学に新しい提案をお持ちしましたところ、「寄付講座」などどうですか、といわれまして、グループの住友銀行が当時協定を結ばれていて、相談いたしましたところ、そういう話があるのならやってみたらといわれまして、始めた次第です。当時の大阪本社代表（副社長）が研究所へ来られまして、こういうお話があって協力してくれと言うことだったのですが、当社としても百周年記念で研究所が出来たばっかりで、余裕がありませんでした。そこでバックアップはいたしますと答えました。そして相談いたしまして、第一線をちょっとひかれてゆとりのある方を人事部で探しまして、その方に講義をお願いし、研究所としましてはデータを提供したりというバックアップをするという体制を考えました。そのときはまだ人は確定していなかったのですが。で、最初は小西さんが担当されたのです。小西さんが6年、私が講座を担当して２年になります。

「損害保険論」はすでに東京海上が寄付講座でやっていると言うことでしたので、それと違ったものと言うことで「リスク・マネジメント論」という講座を提案いたしました。住友生命は今でも法学部で前原さん（今は研究所におられます）が「生命保険論」を担当されています。前原さんも7年目だと言われていました。やはり営業の第一線におられる人は講義はなかなか担当できないもので、研究所が担当するというケースが多いようです。

また、どういう風にやるかは経験のある会社に相談するということになりまして、住友銀行に相談しました。寄付講座にも、お金は出すが講義内容は大学にお任せするという形と、会社の方から人を出すといいますか講義を担当するという形のものとがありますが、最近は後者の形が増えてきているように感じます。

学生の関心度・理解度

上級回生の方が関心を持つ理由ですが、まず基礎知識が必要だからでしょうね。3，4年生でも実社会の経験がありませんから、どの程度お話をして良いか迷うところです。

現実は理論通りにいかない

理屈は解っていてもなかなかうまくいかないことが多いもので、コンプライアンス（法令遵守）といいますが、トップがそう思っていてもそれを何千人何万人という全社員に徹底させるというのはなかなか難しいものです。

トップがそういう風に宣言して部店（部とか支店）のレベルでコンプライアンス・オフィサーとして支店のトップ自らがオフィサーになってコンプライアンスをやれといっても、やっぱりちょっとルールを崩すとビジネスが取れるというときには、業績とのかねあいで法令に抵触することをする人はやっぱり出てくるものですね。だから人事考課あるいは業績評価ですね。コンプライアンスについて著しくトラブルを起こした人は考課とか昇進に反映させてそれが定着しないといけません。しかも新しい人が絶えず入ってきます。それこそ不正直なことやって業績を上げて昇進しているなどということがあると、これはもう崩れてしまいます。

最近だって、談合などしょっちゅうあるでしょう。談合がばれると、公共工事の指名から外れる。場合によっては談合で高くなった分について損害賠償を受ける。それでもゼネコンの談合体質は長年のものですからなかなか直りませんよね。むしろ共存共栄で長年やって来たわけで、天下りを含めれば、発注者とも「談合」しているわけで、道路公団でもありましたからね。談合などをやっているようではグローバル・スタンダードにあわないから、企業としては問題があるというか、そういう企業は将来が危ない。企業はトップが法令遵守をするという、そういう認識であっても隅々にまで浸透させるのはなかなか難しいですね。

リスク・マネジメントの定着には時間がかかる

リスク・マネジメントを一生懸命やっている企業でも、それが完全に定着するのはなかなか難しいですね。社内の出世競争で、やはり、無理をする人がいるのですね。同僚を出し抜いて、正攻法ではないけれども、業績を上げるというのがあるわけですね。

我々の身近な金融分野では、ハイリスク・ハイリターンの金融商品がありますね。良いことばっかり言ったら売れますけれどね。

リスクがいっぱい

大和銀行NY支店の不正取引事件（株主代表訴訟）で役員に対し830億円の巨額判決が出て話題になりましたね。あの場合、一人の行員がかなり長い間簿外取引をやっているということをトップは知らなかったわけですね。あの人はその道の専門家だ、プロだからと、任したわけですね。そしたら発見もできなかったわけですね。これはもう企業や株主にとって大変な損失ですね。最終的には和解決着しましたが。ああいうのはやっぱり中小企業のように、見渡せば全社員が分かるというのであれば、上がしっかりしていれば起こらないですけどね。大きな組織だとそう簡単には行かないですね。よほど予防と発見のための仕組みを整備しないと。

小さいところはトップがしっかりしているかどうかなのですね。トップ自身がいかにバレないようにするか、というスタイルですと、これはもうだめですね。

今の学生を見ていて

どちらかというと、全く授業中私語はありませんね。授業の途中に出入りをするというのはあまりありません。真面目ですね。ただし、大教室ですから、活発な質疑応答というのはありませんね。日本人の特性からしてそうなるようですね。

私、前に東南アジアの人を対象とした「アジア保険学校」というのがありまして、アジア各国の保険会社に勤めている人、保険の監督官庁につとめている人たちを日本に呼んで教育するというのが業界にあって、そこで何回か講義したことがあるのですが、そこでは授業の半分以上が質疑応答で、ですから、アジアの人もとにかく手を挙げてしゃべるというところがあるわけです。日本はアジアの中でも少し違うのかなと思います。講義は英語です。もっともアジアの人はほとんど英語は大丈夫ですし、ですから、特にアメリカとかヨーロッパで勉強した人たちでありません。フィリピンの人なんかは、ついこの間までロックンロール・シンガーだったなんていう人がいました。向こうは転職がよくありますから、前歴はもう様々です。

その点、日本人は少しシャイなところがあるのですね。それはそれで良さだとは思いますが。

昔の学生と比べて

外見上はずいぶん違いますよ。昔は学生服ですし、服装なんか違いますよね。女子学生も増えたし。けれど、まじめに聞いているという限りではそれほど昔と違わない。

大教室で接する限りでは、まー、あんなもんかなと。講義の最初の回にはたくさん出てきて、また終わりの回にもたくさん出てきてと、われわれの時もそうだったなと思います。もっと変わっているかなと思っていたのですが、それほど変わっていない。服装などは違いますが。東京などたくさん学生がいましてピンからキリですからね。街で見る限りあれが学生かと思うのがいっぱいいますからね。

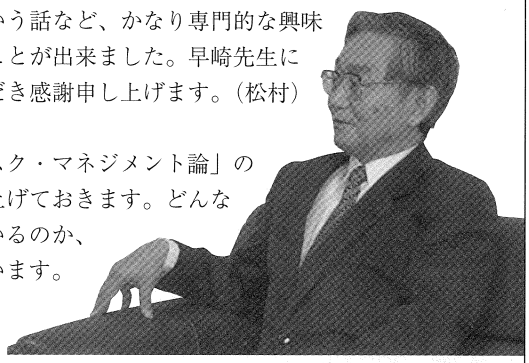
RISK MANAGEMENT

今の大学、大学の今後について

それにしても学校の設備は良くなりましたね。パワーポイントも使えるし。今は校舎も良くてということでないと学生も集まらないのでしょうね。外国人や社会人のひとも教室で見かけます。

社会人の人も一般教養を飛ばして専門教育を受けることができるようになればよいのではないでしょうか。これから元気な高齢者や子育てを終わった人も増えるでしょうから。カルチャー・スクールがあんなに混んでいるのですからね。

（インタビュー後記）本当はもっとお話しいただいたのですが、紙幅の関係で編集させていただきました。とくに、最近のニューヨーク・テロ事件で某損保が再保険を引き受けていて破綻した話など、慎重さを欠いて調査不足かつ、チェック体制不足が損失を招いたのだろうという話など、かなり専門的な興味深いお話も聞くことが出来ました。早崎先生にはお時間をいただき感謝申し上げます。（松村）



参考までに「リスク・マネジメント論」の講義シラバスを上げておきます。どんな講義が行われているのか、参考になると思います。

○テーマ：現代企業のリスクマネジメント論

最近マスコミや日常生活で「危機管理」、「リスクマネジメント」という言葉が市民権を得てきた。これは社会が発展、複雑化するほど、また、国際化するほどリスクが増大している証左であろう。企業を例にとれば、企業は多種・多様なリスクに囲まれて活動している。地震や台風や火災はもとより、製造物責任や環境汚染責任をはじめ独禁法違反、特許侵害、株主代表訴訟などを巡る事件が連日のように報道されている。さらに、少子高齢社会の進展、地球環境時代の到来、情報化時代といった世の中の変化も企業にとって対処すべきリスクである。このため、企業は経営目標の推進と同時にリスク管理機能を併せ持たなければならない。本講義では、火災、台風などの在来型のリスクに加え、企業が現在直面している現代特有の経営上のリスクも対象とする。こうした多様なリスクに対するマネジメントの切口から現代企業経営の課題を提示し、学生諸君と共に考えてみたい。

授業の流れ（スケジュール・内容等の計画）

1. リスクマネジメント・総論　リスクマネジメントの基本的構造
2. リスクマネジメント各論（1）　地震リスク
3. リスクマネジメント各論（2）　製造物責任（PL）リスク
4. リスクマネジメント各論（3）　国際取引リスク
5. リスクマネジメント各論（4）　コンピュータ犯罪リスク
6. 地球環境時代と企業　公害時代から地球環境時代へ
7. 少子・高齢社会と企業　企業内諸制度の改革、マーケットの変化
8. 国際化時代と企業　"グローバルスタンダード"への対応
9. 消費者の時代と企業　消費者契約法、金融商品販売法etc
10. 規制緩和の時代と企業　自由競争時代の公正競争ルール・独占禁止法
11. 情報開示の時代と企業　"ディスクロージャー"と透明性
12. 株主代表訴訟と企業　今や経営者の経営判断に影響
13. リスクマネジメントと保険　保険は何ができるか、どこまでできるか
14. "変化はリスク"　リスクマネジメントの将来展開

振興会第5回総会および記念シンポジウム開催

2002年6月1日（土）、BKCキャンパスのエポックホールにおいて、経営学振興会第5回総会が開催され、2001年度事業、決算および2002年度役員体制、事業計画、予算等が承認されました。

引き続き開催された記念シンポジウムでは、松村勝弘経営学部教授の進行で『産学連携と地域振興』をテーマに4名のパネリストにより活発な議論が展開されました。シンポジウムには会員のほか一般市民の方の参加も得て、パネリストの意見に頷いたり、時には笑い声もあがって楽しい雰囲気で進められました。シンポジウムの詳細は、次号に掲載する予定で準備していますので、お楽しみに。

2002年度経営学振興会事業

セミナー開催計画

第1回　2002年8月3日（土）

時　間；午後2時～4時30分（予定）
会　場；大阪オフィス
テーマ；『（仮）情報システムのリスク管理
　　―オペレーションリスクをどう防ぐか―』
講　師；井上幸美氏（理工学部教授）
※終了後、交流会を開催する予定です。

第2回　2002年11月30日（土）

時　間；午後3時～4時30分
※40周年記念講演会と共催（予定）
会　場；京都ホテルオークラ

第3回　2003年1月18日（土）

時　間；午後2時～4時30分（予定）
会　場；東京オフィス
テーマ；『（仮）現代企業の諸問題』
講　師；藤田敬司氏（経営学部教授）
※終了後、交流会を開催する予定です。

第4回　2003年3月

京都にて開催の予定。

詳細は、その都度ご案内いたしますが、今からご予定いただければ幸いです。

ご入会のお申し込み、振興会の活動の内容等の
お問い合わせは下記へ
立命館大学経営学振興会事務局（教務センター・経営学部内）
keieigaku@hotmail.com　Tel.077-561-3941
http://www.ritsumei.ac.jp/ba/shinkoukai
最新情報はホームページをご覧ください。

第2回ビジネスプランコンテスト

昨秋開催された2001年度ビジネスプランコンテストでは、38件の応募がありました。第１次審査の書類選考で最優秀賞候補2作品と佳作4作品が選ばれ、最優秀候補2点は、2001年12月1日（土）エポックホールで開催の「2001ゼミナール大会プレゼンテーションコンテスト・2001ビジネスプランコンテスト」でゼミナール大会プレゼンテーションの4作品とともに発表を行いました。参加の振興会会員や教員から質疑等が出され活発な意見交換が行われました。その後、審査委員により最終審査が行われ、最優秀賞等受賞者に研究奨励金の授与が行われました。

今回は応募数が昨年に比べ増えましたが、まだまだプランの域を越えず、残念ながら企業化可能な内容の作品はありませんでした。今後に期待します。結果は以下の通りです。

■ビジネスプランコンテスト部門

・最優秀賞　　該当作品なし
・優 秀 賞　　2作品　　研究奨励金5万円
　「携帯電話持ち込みアトラクション」
　「健康優良商品診断ビジネス」
・佳　　作　　4作品　　研究奨励金2万円
　「セルフカクテルバー」
　「マイシャンプー＆コンディショナーショップ」
　「ジョータイワカール」
　「カレッジウォーカー」

■ゼミナール大会
プレゼンテーション部門

・最優秀賞　　1作品
　研究奨励金3万円※
　「21世紀の小型車戦略」
・優 秀 賞　　3作品　　研究奨励金2万円※
　「華人系企業の躍進～タイ経済における影響を踏まえて～」
　「効果的な広告戦略とは何か？」
　「確定拠出年金の現状と今後」

（※研究奨励金は振興会分担額）

編集後記

ようやくアクロス第8号をお届けできることになりました。この間、事務局の人事異動、経営学部校友会（仮称）立ち上げ準備などに時間をとられ、発行が遅れてしまいました。お詫びいたします。経営学振興会第5回総会を終え、次なる飛躍を控えているというのが現状です。今秋、経営学部校友会（仮称）は立ち上がりますが、経営学振興会の同志的・サークル的つながりは大事にしたい。そしてこの輪を徐々に広げていきたい。そのためのステップとして校友会を立ち上げたい。そのように思います。この間蟹江会長をはじめとする会員諸兄姉のご指導の下、大学という枠にとらわれず経営、経営学を考えることができるようになったと思います。この貴重な経験を次のステップに活かしていきたいと考えています。（M）